広島大学大学院教育学研究科紀要　第二部　第59号　2010　211－218

外国語活動・小中連携に対する小中学校教員の意識差からの示唆

― 質的研究を通して ―

階　戸　陽　太

（2010年10月７日受理）

Suggestions from Differences in Awareness of Elementary and Junior High School Teachers of What Foreign Language Activities, and Cooperation between Elementary and Junior High School Mean
― Through the qualitative research ―

Yota Shinato

Abstract: The purpose of this study is to present some case studies of Foreign Language Activities and Cooperation between Elementary and Junior High Schools in English language education in Japan, and to make inferences of some of the conditions and issues in Foreign Language Activities as a compulsory element in elementary schools in 2011. Interviews were conducted with 20 elementary and 12 junior high school teachers in Ishikawa Prefecture, where English language education is introduced in elementary schools earlier, and from these interviews the data of two elementary school teachers and two junior high school teachers were selected and the results analyzed. Three things became clear. First, the "English Notebook" was the main material used in their Foreign Language Activities classes and was an important factor in making annual plan, lesson plans and other teaching materials. Second, junior high school teachers felt Foreign Language Activities had a negative effect on some of their students as these students had come to dislike English or had come to dislike writing in English. Third, the study showed that there were differences in their understanding of the meaning of Cooperation between Elementary and Junior High Schools.

Key words: Foreign Language Activities, Cooperation between Elementary and Junior High Schools, Awareness of teachers
キーワード：外国語活動，小中連携，教員意識

1．はじめに

2011年度より，小学校において外国語活動が必修化されることになった。外国語活動が必修化された経緯の一つとして，総合的な学習の時間の中で行っている英語活動を実施する小学校が増え，小学校間の英語活動のばらつきが指摘されるようになってきたことが挙

本論文は，課程博士候補論文を構成する論文の一部として，以下の審査委員により審査を受けた。
審査委員：深澤清治（主任指導教員），中尾佳行，松浦伸和，森　敏昭，畑佐由紀子

げられる（文部科学省，2008a：p.4）。こうした英語活動実施の拡大に伴い，中学校との連携の必要性についても指摘されるようになってきていた。しかし，小中学校教員の間に，英語活動に対する意識差が存在していた（大下，2007，階戸，2007）。

そこで本研究では，外国語活動と小中連携に対する小中学校教員の意識について調査・分析を行い，以下の２点について明らかにすることを目的とする。

１）外国語活動・小中連携について実態調査を行い，その事例を示すこと。

２）外国語活動必修化を控えた現状と課題を示すこと。

２．背　景

外国語活動の必修化が決まり，小学校５，６年生で週１時間の外国語活動が全ての小学校で行われることになる。しかし，『小学校学習指導要領解説外国語活動編』では，「各学校においては，児童や地域の実態に応じて，学年ごとの目標を適切に定め」（下線は筆者）（文部科学省，2008a：p.13）とある。このことは，外国語活動においても「ばらつき」のある可能性を示している。一方，中学校に対しては，『中学校学習指導要領解説外国語編』の中で，「…地域の小学校における外国語活動の指導において，どの程度の素地が養われているかを十分に把握すること」を求め，更に「扱われている単語や表現などについてもきめ細かく把握した上で，特に第１学年の指導計画の作成の参考にすることが大切である」としている（下線は筆者）（文部科学省，2008b：p.56）。中学校に対しては，小学校で行われていることの把握を求めていることがわかる。

以上のようなことから，小学校の外国語活動と中学校の英語科との連携が必要であることがわかる。

３．先行研究

英語活動での小中連携に関するこれまでの調査・研究は，大きく２つに分けることができる。

一つには，限定された中学校区の小中連携を扱ったものが挙げられる。熊ノ郷（2004）では，和歌山県中部のある小学校と中学校の小中連携の取り組みを取り上げ，授業観察と教員の言葉から小中連携の課題についてまとめている。小学校に対しては，英語活動を行う目的の明確化を求め，中学校に対しては，入門期の指導の研究を求めている。川上（2006）では，文部科学省の研究開発校に指定された鹿児島県の小学校の小中連携を取り上げている。小学校の英語活動をもとに中学校の英語教育を変えていくという考えで，小学校の目標の明確化，小学校間の情報交換，小中の情報交換の必要性について述べている。しかし，教員や学習者の意識は，わからない。また，いずれの研究も，限定された地区を対象としているため，一つの事例と言える。

もう一つの調査・研究としては，複数の県から小中学校を抽出して行ったアンケート調査をもとにしたものがある。大下（2007）では，中部・近畿の６県の小中学校からそれぞれ10% を抽出し，アンケート調査を行っている。その中で，小中連携が進んでいないことを指摘し，小中連携の課題について提言している。さらに，小学校と中学校で意識の差があることを指摘しているが，その要因については，わからない。

教育の実態を考えた場合，１つの県で小中連携の実態を調査する必要がある。そこで，階戸（2007, 2008, 2009）では，石川県において県内の全公立小中学校を対象としてアンケート調査を行った。小学校では外国語活動（英語科）担当者，中学校では英語科主任に回答してもらった。この中で，小中教員の意識差があることがわかった。例えば，表１のように，小中連携の実施について，連携を行っている割合は，年々増加していたが，小学校教員と中学校教員の回答に３年間続けて違いがあった。しかし，こういった小中教員の意識差の要因について，把握することができなかった。こういった意識差の要因を明らかにすることが，よりよい小中連携につながるのではないか，と考えた。

そこで，アンケートを通した量的な調査ではなく，インタビューを通した質的な調査を行うことにした。

表１　小中連携実施の推移（石川県）

	2007 年	2008 年	2009 年
小学校	39%	39%	49%
中学校	55%	60%	64%

４．調　査

4.1. 対　象

対象は，石川県の公立小中学校教員とした。石川県で調査を行う理由として，英語教育で先行していることが挙げられる。金沢市が特区として小中一貫の英語教育に取り組んでいるために，小学校での英語活動（外国語活動），小中連携に対する取り組みが，県内の他の地域にも広がっている。そのため先行する事例が得られる可能性が高いため，調査の意義があると考えた。

参加者は，前述の2009年のアンケート回答者から抽出した。小学校では20名の外国語活動（英語科）担当者，中学校では12名の英語科主任とした。選択の基準は，アンケートの自由記述を参考にし，できるだけ地

区が重ならないようにした。

本論文では，小学校教員２名，中学校教員２名を取り上げて，分析・考察を行った。

4.1.1. 小学校教員２名の背景

石川県南部のＫ市に勤務する２人の小学校教員を比較する。Ｋ市では市全体で英語活動に取り組んできた。また，小中連携に関しても，研究指定を受けた中学校区が過去にあった。この市の回答者から，教員歴の違いと英語に対する気持ちの違いを基準に，２人の教員を選択した。

小学校教員Ａは女性で，教員歴は20年である。英語にかかわって６年になる。アンケートでは，小中連携は「あり」と回答していた。自由記述は未記入であった。他町から異動して来て現勤務校では１年目である。英語は専門ではなく，小学校でかかわるようになった。

小学校教員Ｂは男性で，教員歴は７年である。また，英語とかかわるようになって７年になる。アンケートでは，小中連携は「なし」と回答していた。自由記述では，「小中連携よりもまず小学校の内容が大切」と書いていた。他市から異動してきて２年目である。英語の免許（中学校１種）を取得している。

表２　小学校教員の背景

	教員 Ａ（女性）	教員 Ｂ（男性）
教員歴	20 年	７年
小中連携	あり	なし
英語	苦手意識	教員免許あり

4.1.2. 中学校教員２名の背景

中学校教員は地区の違う２名を選択した。自由記述を参考に，内容が小学校に対してプラス傾向かマイナス傾向かを基準にした。

表３　中学校教員の背景

	教員 Ｃ （女性）	教員 Ｄ（女性）
教員歴	19 年	８年
小中連携	なし	あり
自由記述	マイナス	プラス

中学校教員Ｃは女性で，教員歴19年になる。前出の小学校教員と同じＫ市に勤務している。アンケートでは，小中連携は「ない」と回答していた。自由記述では，「小学校で英語ギライを作らないで欲しい」，「聞く・話す，の活動を充分楽しめるような活動をして欲しい」と書いていた。小学校勤務の経験があるが，その時は，英語活動は行っていない。

中学校教員Ｄも女性で，教員歴８年になる。石川県中部のＳ町に勤務する。このＳ町も小学校での英語に対する取り組みは早い。平成８年にはクラブ活動の時間を利用して，外部講師による英語の授業をスタートさせていた。アンケートでは，小中連携は「あり」と回答していた。自由記述では，「情報交換は必要」，「出前授業は児童の実態をつかむためにも効果的」と書いていた。他郡市から現勤務校へ異動し，２年目になる。

4.2. 期間・方法

調査は，学年末の多忙になる時期を避けて，2010年１月末から３月上旬にかけて実施した。

インタビューによる調査を行った。事前に電話連絡をして，直接学校を訪問した。半構造化インタビューとし，以下の内容を基本に質問を行った。小学校教員に対しては，１）教員歴，２）英語とかかわった年数，３）必修化が決まってからの変化（教員，学習者など），４）英語ノート，５）小中連携，６）これからの課題，を基本としてインタビューを行った。中学校教員に対しては，１）教員歴，２）外国語活動について，３）小中連携，４）これからの課題，を基本とした。

4.3. 分　析

分析は，以下のような手順で行った。

１）小学校教員のインタビューから，「外国語活動の現状・課題」，「小中連携の事例」にあたる部分を抽出し，２名の意見を比較した。

２）中学校教員のインタビューから，「中学校教員から見た外国語活動のプラス面，マイナス面」と「小中連携の事例」にあたる部分を抽出し，２名の意見を比較した。

３）「外国語活動」と「小中連携」の観点で，小中学校教員の意見を比較・分析した。

5．結　果

5.1. 小学校教員の結果

5.1.1. 外国語活動

外国語活動について，２人とも「英語ノート」の効果について述べていた。「英語ノート」ができたことにより，年間指導計画，指導案，教材の作成の時間を省くことができるようになった。「以前よりはやりやすくなった」と２人とも述べている。特に，英語に自信がない教員にとっては，「指針になる」（教員Ａ）という声があった。

ただ，これまでの英語活動の実績があるため，「内容的には難しくない」（教員Ａ）としている。教材については，これまでの物も使用するが，「英語ノート」に即した教材を使ってしまう（教員Ｂ）。（APPENDIX A ①②参照）

また，毎週１回実施されることによる効果について両教員ともに指摘していた。教員Ａは，一つの単元を４週続けることで，「３時間目，４時間目になったら結構慣れる」ことを述べていた。一方，教員Ｂは，「毎週１回あるっていうことなので，それだけ英語に触れる機会が子どもらにとっても僕らも多くなったんです」と，児童だけでなく，教員も英語に触れる機会が増えたことを指摘していた。

5.1.2. 小中連携の形

小中連携の形として，英語に自信のない教員Ａは，「ALT で連携を行っている」とした。これは，中学校に配属されている ALT が，校区内の小学校も教えていることをさしている。同じ ALT が教えることで，指導内容の統一を図ることができる。また，「話す」「聞く」で中学校とつながっていくと指摘していた。

一方，大学時代に英語の免許を取得した教員Ｂは，「コミュニケーションの能力を育てる」ということでの連携の可能性について述べていた。この教員はアンケートの自由記述では，「連携よりも小学校での指導内容の確立が大切」としていたが，「英語ノート」で授業を行い，小中連携についても必要と感じるようになった。普段の外国語活動の授業では，「コミュニケーションをとる態度を育てたい」という思いで授業を行っている。（APPENDIX A ③④参照）

5.2. 中学校教員の結果

5.2.1. 外国語活動（プラス面）

両教員ともに，「話す」面での成果を挙げていた。さらに教員Ｃは「聞く」面での成果も挙げ，「音に対する反応」「聞き取り」「同じようにまねていること」が伸びてきていると指摘していた。教員Ｄは，話す面でのボキャブラリが多いとし，習熟度の低い生徒でも，「スピーキングはいい」ことを挙げていた。

中学校教員は，小学校での成果を「話す」「聞く」面で感じていることがわかる。（APPENDIX A ⑤⑥参照）

5.2.2. 外国語活動（マイナス面）

教員Ｃからは，小学校でのマイナス面の指摘もされていた。「英語嫌い」の増加と「書くこと」を嫌がる傾向の２点が挙げられていた。

「小学校の時に英語でバーっと言われて」（教員Ｃ）「わからない」「嫌だ」という思いを持って，中学校へ上がっている生徒がいることが指摘されていた。「特に増えた，というわけではない」（教員Ｃ）が，「小学校わからんかった」（教員Ｃ）という思いを持っている生徒がいることがわかる。

習熟度の低い生徒は，「話す」ことに対しては意欲的に取り組む反面，アルファベットの大文字・小文字を書くことに抵抗感を示すことが挙げられていた。（APPENDIX A ⑦参照）

5.2.3. 小中連携の形

教員Ｃは，小中教員の教科ごとの研究会があることについて述べていた。研究会の中では，小学校，中学校それぞれから代表の教員がワークショップで指導法の提示をし，意見交換を行っている。こういった研究会の中で，「お互いのことがよくわかり，要望なども伝えあって」いくことができる。

一方，教員Ｄは，お互いに授業を見合うことの大切さを指摘していた。授業を見合うことの利点として，生徒理解につながることが指摘されていた。また，教員自身も緊張感を持って授業をできることも指摘していた。

このように中学校教員から出された小中連携は，お互いを知ることに視点が置かれていると言える。（APPENDIX A ⑧⑨参照）

5.2.4. うまくいかない小中連携

小中連携として，機能しない事例が両方の教員から出ていた。まず，教員Ｃの前勤務校では，小中連携の研究指定を受けていた。「結構実は（小中で）行き来はしていて，中学校の先生がデモンストレーション的に授業をしたり」していたが，「その後，研究じゃなくなると，なかなか時間が難しいので」連携はできなくなった。（（　）内は筆者補足）

教員Ｄは，前年度出前授業（※中学校の教員が小学校へ出向いて授業を行うこと。）を校区内の１つの小学校と行っていた。しかし，今年度は残り２ヶ月ほどになっても，出前授業の話がないと述べていた。

後日，出前授業先の小学校で話を聞いた。この小学校では，前年度まで英語活動の研究指定を受けていた。研究の絡みから，小学校側から中学校に出前授業を依頼した経緯があった。小学校の校長によると，研究指定が終わった後も出前授業は継続するとのことで，中学校へお願いしたが，新型インフルエンザによる学級閉鎖の影響で，中学校側が７限目も授業を行っている事情で，一旦断られたとのことであった。このことが，教員Ｄにはまだ伝わっていなかったようである。

二人の教員の話から，次の２点のことを指摘したい。１点目は，小中連携の効果はわかっていても，研究指定が終わってしまうと，継続できない実態がある，ということである。２点目は，小中連携が新型インフルエンザのような突発的な出来事に影響を受けてしまう，ということである。（APPENDIX A ⑨⑩参照）

6．考　察

6.1. 小学校教員の結果からの考察

外国語活動について，２人に共通点として，「英語

ノート」の効果と「週１時間」の効果が挙げられていた。これは外国語活動のプラス面についての意見である。「英語ノート」は，外国語活動の内容の均一化を目的の一つとして作られたもので，全て行う必要はなく，教える教員の判断に任されている。このため，外国語活動にばらつきが生じる可能性がある。実際に教員Ａは，「ALT と相談してやらないところもある」と述べていた。

小中連携では，違った意見が出てきた。小学校で英語にかかわるようになった教員Ａは，「ALT での小中連携」を挙げていた。これは現実的な連携と言える。一方，英語の免許を取得している教員Ｂは，「コミュニケーション能力を育てる」連携について述べていた。これは「コミュニケーション能力の素地を養う」という外国語活動の目標を踏まえた意見であり，より積極的な連携と言える。このような違いが表れている背景には，英語に対する気持ちの差が影響していると考えられる。

6.2. 中学校教員の結果からの考察

２人の中学校教員は，小学校での効果として，両教員ともに「話す」ことに対する成果を挙げていることである。音声を中心として行っているこれまでの英語活動，外国語活動の成果が現れていることを示している。

しかし，教員Ｃは小学校でのマイナス面を指摘していた。「英語嫌い」の増加と中学校で「書くこと」を嫌がる傾向があることである。これは，これまでの小学校の取り組みから出てきた結果であり，これから外国語活動を行う上での課題と言えよう。一方，教員Ｄは，小学校でのマイナス面については指摘していなかった。インタビューでも，英語が苦手な生徒の良い面を指摘し，書くことが苦手な生徒を励ましていることを述べていた。このように，中学校教員の中にも外国語活動に対して意見が分かれていることがわかる。

大下（2007）では，小中連携の内容の充実が必要であることが述べられているが，教員Ｃは小中連携について，市の研究会での連携を示し，ワークショップを行っていることを述べていた。情報交換だけではない連携が行われていることがわかる。一方，教員Ｄは小中教員の「行き来」，「授業の参観」が大切だとしていた。このように，小中連携の実態にも差があることがわかる。教員Ｃは，前任校で小中連携の研究指定を経験している。このことが，小中連携に対する意見の差になっていると考えられる。

うまくいかない小中連携の事例も挙がっていた。教員Ｃは，研究指定が終わると連携が「時間がない」という理由で行われなくなったことを挙げていた。一方，教員Ｄは突発的な出来事で連携が見送られる事例について述べていた。これらは，小中連携が時間的制約や優先順位のためになくなってしまうことがあることを示している。このことから，小中連携が重要視されていないことが推察される。

6.3. 小中教員の結果比較からの考察

表４　小中教員の意見の比較

		小学校教員	中学校教員
外国語活動	＋面	・英語ノートの効果 ・週１回による効果	・「聞く」「話す」面での効果
	－面	※発言なし	・「書く」こと嫌がる ・「英語嫌い」の存在 （教員Ｃ）
小中連携		・ＡＬＴでの連携（教員Ａ） ・「コミュニケーション能力を育てる」連携（教員Ｂ）	・「市の研究会」での連携（教員Ｃ） ・「（教員の）行き来」，「授業の参観」による連携（教員Ｄ） ・研究指定のための連携（教員Ｃ） ・突発的な出来事でなくなる連携（教員Ｄ）

6.3.1. 外国語活動について

外国語活動に対して，小学校教員，中学校教員ともに，プラス面について述べていた（表４参照）。同じ効果ではあるが，小学校教員の指摘は，外国語活動を実施することに関連した効果と言える。一方，中学校教員の指摘は，外国語活動の結果であり，またそれを受けてきた生徒の状態からの成果でもある。そのため，中学校教員は，外国語活動のプラス面の指摘だけでなく，マイナス面についても指摘していた。

このように，小学校教員は，外国語活動のプラス面の指摘に留まっているが，中学校教員はマイナス面にも意識が向いていることがわかる。

6.3.2. 小中連携について

小中連携の形として，小学校教員からは，一つは「ALT による連携」という現実的な連携が示された。これは，小学校だけで行えるものとも言える。もう一つは，「コミュニケーション能力を育てる」という学習指導要領を踏まえたものである。これらは，内容的な面での連携であり，中学校との話し合いが必要になる場面もあるが，内容が決まってしまえば，小学校だけで行える。一方，中学校教員からは，「市の研究会」での連携，「行き来，授業の参観」による連携が示されていた。これらは，相互理解の連携である。中学校教員は，小学校を理解しようとしていることがわかる。

このように小学校教員と中学校教員の連携に対する考え方に違いが伺える。この違いは，これまでの英語

活動の流れによるものと考えられる。『小学校英語活動実践の手引』にあるように，英語活動は「中学校の学習内容を先取りするようなことは避けなければならない」（文部科学省，2001：p.3）という立場で進められてきた。一方，中学校教員は，これまでの英語活動を中学校の英語教育と繋がるものと捉えているため，お互いに知ることを求めている。外国語活動が原則英語を扱うこととされ，必修化されることを考慮すると，こういった意識の差を埋めるためにも，お互いを知る小中連携は必要であると言えよう。

7．まとめと課題

本研究では，小中教員の意識から，1）外国語活動・小中連携について実態調査を行い，その事例を示すこと，2）外国語活動必修化を控えた現状と課題を示すこと，を目的とした。その結果，以下のことがわかった。

「外国語活動・小中連携の事例」については，次の3点が挙げられる。

第1に，小学校では「英語ノート」を主体として，外国語活動が進められていることが示された。また「英語ノート」の存在が，小学校教員の負担軽減につながっている。

第2に，中学校教員は，小学校の成果として「話す」「聞く」に生徒の伸びを感じながらも，「英語嫌い」の存在と「書く」ことへの抵抗感というマイナスの面も感じていることである。

第3に，小中連携に対して，小学校教員と中学校教員に考え方の違いが示された。小学校教員は，現実的な連携，内容が決まってしまえば小学校だけで行えるような連携をイメージしていた。一方，中学校教員は，「研究会」や「行き来，授業参観」といった，相互理解の連携を求めていた。

次に「外国語活動必修化を控えた現状と課題」については，以下の点が挙げられる。中学校教員が指摘していたように「英語嫌い」「書くことへの抵抗感」というマイナス面が，これまでの英語活動にあることである。これらは，これからの外国語活動の課題になると言えよう。解決のためには，小中連携が有効である。

外国語活動の必修化は決まったものの，課題も多い。課題解決のためにも小中連携は必要である。小中連携によって，お互いの意識の差を埋めていくことが，よりよい外国語活動につながっていく。

今後の課題として，以下の3点が挙げたい。

1）小学校教員の外国語活動に対するマイナスの意見はないのか，分析すること。

2）さまざまな小中連携について分析すること。

3）同じ中学校区内の小中教員の比較・分析すること。残りのインタビュー結果についても分析を進め，明らかにしていきたい。

【謝　辞】

学年末の多忙な時期に，快くインタビューに応じて下さった石川県の先生方に心から感謝を述べたい。

【引用文献】

大下邦幸（2007）.「小中連携の実態：アンケート調査の結果から」.『小学校英語と中学校英語を結ぶ』(松川禮子・大下邦幸編)，23-62. 東京：高陵社書店.

川上典子（2006）.「小学校英語教育：平佐西小学校の小中連携の取り組みから」.『鹿児島純心女子大学国際人間学部紀要』，**12**，17-30.

熊ノ郷朋子（2004）.「英語教育における小中連携」.『和歌山大学教育学部実践総合センター紀要』，**14**，69-71.

階戸陽太（2007）.「英語教育における小中連携に関する調査研究」.『小学校英語教育学会紀要』. **8**，69-74.

階戸陽太（2008）.「英語教育における小中連携に関する継続的調査・研究」.『第34回全国英語教育学会東京研究大会発表予稿集』，354-355.

階戸陽太（2009）.「外国語（英語）活動必修化を介した小中教員の意識の変化に関する研究」.『日本教科教育学会第35回全国大会論文集』，171-172.

文部科学省（2002）.『小学校英語活動実践の手引』. 東京：開隆堂.

文部科学省（2008a）.『小学校学習指導要領解説　外国語活動編』. 東京：東洋館出版社.

文部科学省（2008b）.『中学校学習指導要領解説　外国語編』. 東京：開隆堂.

APPENDIX A

※Sは筆者。A，B，C，Dは教員。

①小学校教員A　外国語活動

S：…やられてて，何でも感じられるところは，ないですか。先生は，専門ではないんですね。

A：はい。ないです。ないので，まぁ，「英語ノート」がないと，ないというのも変ですけど，組み立てとかは自信がない部分は大きいですけど，ここはこういうふうに進めるんだと，とう指針みたいなものにはなりますね。あと，まぁ，簡単すぎるな，今までしてきてるので，ALTの方と相談して，やらなかったり，というふうにしています。

S：「英語ノート」はあった方がいい，ということでしょうか。
A：そうですね。うーん。これまでに比べれば，ですね。
S：やっぱり，やりやすい…
A：やりやすいっていうのはあります。これまでは，どちらかというと，毎時間それだけのために毎時間指導案を立てて，何をするかというところから，年間計画のところから，みんなで話しあって，指導案たてて，それに関する準備をして，っていう部分があったのが，外国語活動になってからは，一応年間通しての計画みたいなのがありますので，それを目安に進められるという部分では。それがいいのかどうなのかは，わからないですけど。

②小学校教員B　外国語活動
S：「英語ノート」メインでやられているんですか。
B：「英語ノート」メインです。
S：以前使っていた教材とかは，いかがですか。
B：使えるときに，ちょっとひっぱりだしてきて，「英語ノート」と見比べて，あ，ここ使えそうやな，というところは使うんですけど，もう英語ノートの中にも，使える道具みたいものが全てそろってるんです。その，絵カードとか全部ついているので，まぁ，ついそのやっぱり英語ノートに即した教材がついてるので，やっぱどうしてもそっち使いますね。

③小学校教員A　小中連携の形
S：中学校とのからみになるんですけども，連携はあるということで○をつけられていたんですけども。
A：一応ここの学校は，中学校にいる，S地区にいるALTさんが中学校にいるんですが，その方が担当してますんで。
S：なるほど。それで，つながりが…
A：つながりはあるということですね。

④小学校教員B　小中連携の形
S：なかなか難しいところはあるんですけど，どういった形で連携していったらいいですか。
B：例えば，僕，大学の時に英語の中学校1種の，大学でもちょっとやってたので，コミュニケーションとることって言ったら，別に日本語でも外国語でも一緒だと思うんです。それが，手段が英語に変わっただけで，言葉が，例えば日本語から外国語に変わっても，やはりコミュニケーションをとる手段は言葉だと思うので，言葉を使ったコミュニケーションをしようという，気持ちというか，態度というか，その辺を小学校と中学校で連携してやっていかないと，ただ俺この単語，知ってるよ，だけじゃなくて，中学校に行っていろんな子と出会ったときでも，一緒に会話できる力があるとか，高校へ行ってからもいろんな人と，あと子どもたちとも，友達も会話できたり，コミュニケーションとるということが，やはりできるように育てていかないといけないかなと，そう考えると小学校ではここのレベルまでとりあえずやっておこうね，中学校ではその上のこうやってのっけて，ここまでまたのばして，コミュニケーションの能力を育てるって意味で連携，必要かなって思います。今持っている子どもらが晩生なので，あんまりしゃべろうとしないんですよ。なので，なおさらやっぱり，そういうのは感じますね。彼らが中学校にいって，どうなって英語を使っていくか。

APPENDIX B

⑤中学校教員C　外国語活動（プラス面）
S：英語活動が始まってしばらくたつんですけど，先生の印象として，中学校に上がってきた生徒さんたちはどんな感じですか？
C：すごく小学校の方で意欲的にやっていただいているので，すごく音に対する反応，っていうか，耳も聞き取りとか，それを同じようにまねて言うということに関しても非常に伸びている。こちらもびっくりするくらい，すごくよく反応しているな，と思います。

⑥中学校教員D　外国語活動（プラス面）
S：S町はずっと前からやってるとは思いますけど，小学校でやった成果とか，感じられますか。
D：子どもらが？感じますよ。例えば，What's the month? What day is it today?　とか教えてなくても，1年生，言うので，もうすごく，しゃべる面ではボキャブラリは多いと思います。簡単なWhat food do you like? もやってるし，canもきっとやってますね。S小の見ると，全部。習熟度別で，スタンダードとベーシックに分かれているんですが，スタンダードでもベーシックに行くギリギリラインの子がいますよね。トップは，こうやってバラついていても。そのギリギリラインの子でもスピーキングはいいんですよ。あと，書く練習が足らんだけで，こういう子らは導入の時に口頭質問に乗ってくるし，ライティングだけやったら，こういう子らはダウンしちゃうから，その意欲，あれば，「練習すればいいよ」って，励ましてい

るんですが。

⑦中学校教員Ｃ　外国語活動（マイナス面）

Ｓ：それなりの効果っていうか，あるということなんですね。

Ｃ：はい。ただ、それに対して，書くこと，嫌がる傾向は。逆に低下している。

Ｓ：それは，拒否する…

Ｃ：そうですね。

Ｓ：そうなんですか。やっぱり話したり，という方が…

Ｃ：ええ。意欲的に喜んでやる一方で，低い子ですと，大文字，小文字，書くので，わぁっていう感じだったり，ある程度分量があると嫌がったり。それと，繰り返し練習して覚えようっていうことになると，とたんに拒否・・逆に反比例で強くなっているんじゃないかな。

（略）

Ｃ：…あんまり嫌いにならないように。なんか小学校時に英語でバーっと言われて，「わからない」とか「いやだ」という子もいるので，難しいですね。

Ｓ：時々中学校の先生から，英語嫌いが増えたという声を聞くんですけど，先生の印象からみて多くなりましたか。

Ｃ：前は中１から新鮮味があって，みんな同じスタートラインでしたけど，今は既に「全然わからんかった」という子が，何人か，聞いてみると，いますね。特に増えた，とういうわけではないですが，最初から「小学校わからんかった」という思いを持って入ってくる子は何人かいますね。

⑧中学校教員Ｃ　お互いを知る小中連携

Ｓ：連携の話，なんですけど，先生は，連携は「ない」と○されてたんですけど，必修化されたんですけど，これからどうしていったいいんですかね。

Ｃ：今，私，この学校変わってきて，Ｋ市で教科ごとの教科の研究会があって，私，今英語は入っていますけど，そこに小学校の先生方も入っていらっしゃって，かなりの数入ってらっしゃるかな…それで別々の研究会を持つときも。年に数回ある研究会の中で，一緒にやることもあって，先日も小学校の方２組，中学校の方２組，ワークショップでいろんな指導法を提示されたり，最後に意見交換をしたりして，そういう会があるので，とてもお互いにのことがよくわかり，要望なども伝えあって，この学校というものはないんですが，そういう研究会の中で，やっているのはとても。

⑨中学校教員Ｄ　お互いを知る小中連携
うまくいかない小中連携

Ｓ：連携なんですけど，これからどんな形でしていったらいいんですかね。

Ｄ：出前授業に関してはこれから毎年あるだろうという話でしたが，３学期，一つもその話，聞いてないんですよ。だから言うだけじゃなく，実行してもらうたいし，なんでかなって，今思い出したくらい，話がないんですが。

Ｓ：これは委員会の方で，町の委員会で，ということになるんですかね。

Ｄ：たぶん去年は小学校から直接申し出があったと思うんです。Ｓ小の校長先生，近所なんで，お会いした時，そういうことしゃべったら，「今年もぜひ」とおっしゃってたんですが，まだ聞いてなくて。そういう行き来，授業の参観というのも大事だと思います。

⑩中学校教員Ｃ　うまくいかない小中連携

Ｃ：…前の中学校では，連携はしていないと言ったんですけども，小中連携の研究校になっていたときには，結構実は行き来はしていて，中学校の先生がデモンストレーション的に授業をしたり。

Ｓ：Ｎ中ですか？

Ｃ：Ｍ中学校です。そこの校下（※校区のこと）は２つの小学校でしたが，出向いていって，「英語の先生は怖くないよ」って，言って。

Ｓ：教えたとき，どう思われましたか？

Ｃ：あ…とても反応がよくて，楽しかったですね。よく，英語の指示はわかるんだな，ってわかったし。そのときのこと覚えててくれて，中学校に来て，「あのときの先生だね」って言って，つながりができましたし。この子たちこれくらいできるって実感できたと思います。

Ｓ：以前と変わったということはありますか。

Ｃ：そうやって勉強したことによって，その子が何をやっているかわかったし，小学校さんでそのときはノートがなかったので，どの学年が１年間にどれくらいやってるか，カリキュラムを見せていただいて，小学校の様子を把握することができて，じゃこんなことはわかっているから，ここんところは中学校では軽くやって次のところにいける，だとか，中学校の指導に生かすことができたと思います。やってよかったんですけど，その後，研究じゃなくなると，なかなか時間が難しいので，できなかったので。